English Humourists における Thackeray の意図

鈴　木　幸　子

Thackeray's Graphic Description in *English Humourists*

Sachiko Suzuki

W. M. Thackeray 批評において，*English Humourists of Eighteenth Century*（以下 *EH* と記す）（講演1851，出版1853）の評価はさらに小さな範囲に限られている。

EH 批評は19世紀，とくに講演された当時には議論も多く，世紀末までサッカレー評の中で言及されている。[1] しかし20世紀に入っては *EH* 評らしきものは10点に及ばない。[2] 例外として最近 Edgar F. Harden 氏による，*Thackery's English Humourists and Four Georges*[3] が単行本として出版された。氏はここで未発表の資料を多く用いて，創作の経過とそこに一貫して示されるサッカレーの道徳家としての姿勢を実証的に調査し，現在もこの講演集が重要なものであることを強調している。

本論ではこれらの研究，批評をふまえ，時には反サッカレー派の論も参考としつつ講演集のテキストと作者周辺の資料の中から *EH* を再考してみたいと思う。例えば，サッカレーがこの講演で，意識的にまたは無意識な部分も含めて経済的なもの以上に何を意図し，人びとに何を伝えたかったのか，またなぜ彼は18世紀ユーモリストを選んだのかを中心として考えた場合，サッカレー批評において *EH* の重要性が浮び上るのではないかと考えられる。

I

EH のように作者が公開講演を意図した場合，当時ではそれがもたらす収入の大きさから，経済的意図が第一条件として考えられていたと，一般に考えられている。作者の *Letters*[4] などからもこれは否定できない。さらに講演当時，これが成功したため，一層内容についての酷評が作家および当時のジャーナリズム界にあった。その中で最悪のものは，John Forster によるものであった。すでに1847年に“Punch's Prize Novelists”でのカリカチュアがもとで Forster とサッカレーとの間に争いが生じていた。[5] Forster は1851年5月24日の *the Examiner* でサッカレーの講演は一種の“literary entertainment”で，その効果をあげるために多くのものが犠

牲になり，“succesful literary imposture”[6] であると攻撃した。

今世紀に至って，数少ない *EH* 評の中で，最もきびしい評価を与えているのは，20世紀の反サッカレー派の第一人者たちの *EH* 評である。彼らは，*EH* はサッカレーの文学的弱点を露呈しているときめつけている。[7] これら批評家たちの代表的な非難の共通点は，語られる事実が興味本位にサッカレーの主観で歪められているということである。

一方，*EH* を高く評価する批評は19世紀に多く，“the past is truly re-created here.” (238) “thoughtful and picturesque.” (160) “a picture of the wit and manners of the eighteenth century” (171) “Our Graphic Humourists” (676)[8] などであった。これらの評で共通している点は，描かれる，創造されていることである。

これらの批評を総合してみると，不思議なことに，認めるものは同種類のものであるが，批評家が *EH* に何を期待するかによって良否が決められていると考えられる。

II

では，サッカレーの *EH* について語る意図は何であったであろうか。E. F. Harden の *Letters* をもとにした調査では，次の諸点が判っているのみである。サッカレーが最初に講演するプランを述べていることが記されているのは，1850年 9 月15日である。そして約半年後，1851年 2 月の第 1 週では講演のための読書を始めた。そこで彼は18世紀の時代の中に浸り，“I get to fancy myself almost as familiar with one as the other” (*Letters* 2: 761) と述べている。3 月26日までには “About 20 May, let us hope” と講演予定を考えるに至った。[9]

ここで，もう一点考慮にいれなくてはならないことは，講演とほぼ並行して，サッカレーは *Henry Esmond*（以下 *Esmond* と記す）を執筆していることである。Gordon M. Ray によれば[10] サッカレーがこの小説を最初に考えたのは1850年の11月からであった。それは *EH* の講演を思いついてから 2 ケ月後のことであった。そして当時では講演は1851年 5 月22日と決められた。一方 *Esmond* の出版は1852年10月18日であったが，その頃サッカレーはアメリカでの講演旅行に出かけようとするときであった。したがって，George Saintsbury が指摘しているように，*EH* は James Hannay が言う *Esmond* の “only aftercrops or by-product” ではなく，*Esmond* と「相並んで」“*pari passu*” で創作されたものと考えられる。Thackeray は，人生を去る 2 年前に Sir George Russell に “Well, I should like to stand or fall by *Esmond*”[11] (Bio. X, xxxi) と答えている。作者として *Esmond* に彼の文学の最高峰を認めているこの言葉からも，*Esmond* と相並んで作者の文学観を知るには *EH* は重要なものと考えられる。

Ⅲ

次に作者自身が*EH*講演について述べているものを考えてみよう。以下はRitchieが伝える講演前日のサッカレーの手紙である。

The first lecture was given in London of May, 1815. Mr. Lambert of Philadelphia has in his possession the following letter to Richad Doyle written only the day before:

"My dear Doyle; I hope you will come to the tight rope exhibition to-morrow, and send you a card. You and your friend will please sit in distant part of the room."

"When you see me put my hand to my watch-chain, you will say, 'God bless my soul, how beautiful !"

"When I touch my neck-cloth, clap with all your might."

"When I use my Pocket-handkerchief, burst into tears."

"When I pause, say Brav-ah-ah-ahvo, through the pause."

"You had best bring with you a noisy umbrella, to be used at proper intervals; and if you can't cry at the pathetic parts please blow your nose very hard."

"And now, everything having been done to insure success that mortal can do, the issue is left to the immortal Gods.

"God save the Queen. No money returned. Babies in arms NOT admitted."

"By yours ever,

"W. M. T."

(Bio. XI. xiii)

一見，誤解を招きそうなこの手紙は，G. N. Rayも"mock instruction to Dicky Doyle"と述べている[12]ように，幼い頃からの友人であり，カリカチュア挿絵画家Doyleにのみよく理解されるサッカレー自身のユーモラスなスケッチではなかろうか。講演前夜の不安，どれほど講演にあたっての準備をしていても，一回限りの一種のショーであるから"the tight-rope exhibition"であることは免れないであろう。そして"... everything having been done to insure success that mortal can do, the issue is left to the immortal Gods."とは，これまでに読書，調査，原稿書きに努力を重ねてきたものだけに言える言葉であろう。ましてこの"mock instruction"をもってサッカレーの人格にかかわる評価をなすべきではなかろう。"No money returned."については，これを打算的にのみ受け取るものではなく，この講演の重みをひしひしと感じてい

る者の現実的な言葉と受け取れるのではなかろうか。したがって "Babies in arms NOT admitted." の言葉が後に続くのである。ここには講演の妨げになることは決して許されないとの，作者の意気込みが読み取られる。この手紙を見るだけでサッカレー自身のカリカチュア的肖像が彷彿と浮かび上がってくる。

次の Ritchie が紹介しているサッカレーの言葉も，作者がいかに物事を視覚的に表現しないではいられなかったかを示している。

> "My dear Smith," my father once wrote, "how would the lectures do with no end of illustrations." –T. O.– I was drawing these, and that made me write to you. Yours,
>
> "W. M. T."
>
> Here are the sketches over the page in this book. As they are in my father's letter–Captain Steele with his cane and periwig, Mr. Sterne in his bands and buckles, Dr. Johnson pacing the street with Boswell by his side. (Bio. XI, xi) (図A)

図版A

DR. JOHNSON AND GOLDSMITH

出典
The Centenary Biographical Edition of The Works of W. M. Thackeray. 1910-1911 Vol. XI.

MR. STERNE

CAPTAIN STEELE

続いて，次の Ritchie の言葉は，サッカレーの18世紀 humourists 研究の在り方を示していると思われる。

> As one reads the Lectures on the Humourists, one feels how much my father was at ease with all these people, whom he loved and admired. He trod in the actual footsteps of Johnson and Goldsmith, and Steele and Addison. He saw the things they had seen, heard the echoes to which they had listened, he walked up the very streets where they had walked. He was one of them, and happy in their company. . . . he says in one of his letters– "the eighteenth century occupies him to the exclusion almost of the nineteenth," and he carried its traditions along with him. (Bio. XI, pp. xi-xiii)

これは作者と生活を共にした家族の視点によるものであるが，これによっても彼が18世紀の文人を，歴史的な視点から客観的にみるのではなく，自分もその中に入り込んで楽しむという姿勢が感じとられる。それはサッカレーにとって家庭人としてあまり気楽ではないヴィクトリア朝社会から脱出する一つの方法ででもあったのではなかろうか。(The Brookfields 事件)

第一回講演は Willis's Room で 5 月21日の午後行われた。サッカレーは娘たちや Mrs. Carmichael-Smyth に伴われて会場に入った。ここは "the great balls of Almack's" が行われた場所で，壁は彩色と金メッキがほどこされていた。椅子はソファーのように柔らかく，ブルーのダマスク織りの布でおおわれていた。当時としても，かなり豪華な会場であったと思われる。出席者の中には Charlotte Brontë, Thomas Carlyle, John Forster, Hallam, Hayward, Lewes, Macaulay, Milnes など，その時代一流の知識人たちがいた。ジャーナリストたちも出席していたが，その中には反サッカレー派がいたことは勿論である。

E. F. Harden 氏は *EH* の MS 研究をもとに，次のように述べている。

> Thackeray's work in preparing the initial lecture shows considerable struggle to clarify and present more effectively his view of Swift. Part of the lecture's interest therefore, lies in our awareness of this effort, which surviving manuscripts help to reveal.[13)]

Ⅳ

この第一回講演会は成功したようであった。Ritchie の言葉によると，講演が終ると，"everybody clapped," "Requisitions and invitations came from every part of the country, written in neat copperplate handwriting, from various young men's associations and literary clubs." (Bio. XI, xiv) と述べられている。しかし一方では講演から数日後，1851年 月24日の *the Examiner*

で，かねてサッカレーと不仲であったJohn Forsterが彼の講演は事実を曲げているものであるという攻撃があった。しかし，同じく5月24日の *the Spectator* はサッカレーの講演を最もよく認めて，彼の人物評は暖かいものであると述べた。その風刺的特徴は "imparted by deep suffering, and by an over-consciousness of foibles which must be shared to be felt so sharply." である。またサッカレーの語りは "a long soliloquy" であり，その技法は "years, rich in study" により "consummate" となっている。[14)]

このような評価の違いはどこから生じるのか，講演のテキストに当たってみよう。作者はまず第一に次の言葉で彼の意図を明白に示している。

> In treating of the English Humourists of the past age, it is of the men and of their lives, rather than of their books, that I ask permission to speak to you; and in doing so, you are aware that I cannot hope to entertain you with a merely humorous or facetious story. (Bio. XI, 127)

すなわち，ここではSwiftの作品についてではなく，彼の人間像について語るのである，とサッカレーは前置きをする。次にSwiftを "Harlequin" としてのイメージを植え付ける。道化師は観客を笑わせ楽しませるが，その仮面の下には，心配や悩みに満ちた真面目で悲しい人間がいる。そこでSwiftの伝記に移る。ここでは出生からSwiftの死，1745年まで簡単にごく一般に知れ渡っている略歴が，述べられる。(Bio. XI, 128)[15)] そしてSwiftについての数人の伝記作家の特徴，さらにSwiftを作家として，また人間としてみた場合の伝記作家たちの反応を辿る。この作業がSwiftという人物についての人間的興味を，語り手のみならず聴衆にも持たせるに至る。さらにサッカレーは "Would we have liked to live with him ?" と人びとに問いかける。[16)] そこで，この部分をテキストから取り上げて検討してみよう。

> You know, of course, that Swift has had many biographers;[17)] his life has been told by the kindest and most good-natured of men, Scott, who admires but can't bring himself to love him; and by stout old Johnson*, who, forced to admit him into the company of poets, receives the famous Irishman, and takes off his hat to him with a bow of surly recognition, scans him from head to foot, and passes over to the other side of the street. Doctor Wilde of Dublin†, who has written a most interesting volume on the closing years of Swift's life, calls Johnson "the most malignant of his biographers:" it is not easy for an English critic to please Irishmen—perhaps to try and please them. And yet Johnson truly admires Swift: Johnson does not quarrel with Swift's charge of politics, or doubt his sincerity of religion: about the famous Stella and Vanessa controversy the Doctor does not bear very hardly on

Swift. But he could not give the Dean that honest hand of his; the stout old man puts it into his breast, and moves off from him. (Bio. XI, 129-131)

この講演の始めの部分の語り方を見ても，サッカレーの面目が躍如としている。彼は伝記を評するにも，伝記作家に何気なく迫る。やや大胆な方法ではあるが，伝記の本質をかなり的確に把握し，聴き手に現実感を伴って理解させている。例えばScottについては“the kindest and most good-natured of men”と修飾語をつけ，騎士道のロマンスの世界を描くScottでは“can't bring himself to love him;”と語る。聴衆はSwiftについてはさもありなんと，Scottの心情を理解することでSwiftの本質に触れることができる。Johnsonについても同じである。E. F. Harden氏も指摘しているが，“stout old Johnson”と述べることでDr. Johnsonに対する信頼感を示す。そして，“forced to admit,”“takes off his hat to him with a bow of surly recognition, scans him from head to foot, and pass over. . .”と語ることでJohnsonのSwiftに対する複雑な心境が視覚的に伝えられている。またJohnsonについては註で

“He〔Doctor Johnson〕seemed to me to have an unaccountable prejudice against Swift; for I once took the liberty to ask him if Swift had personally offended him, and he told me he had not.” –Boswell's *Tour to the Hebrides*. (Bio. XI, 131) とこれを実証している。さらに130頁の本文に戻ると，Swiftの政治，宗教，婦人問題などにも軽く触れて，Doctor WildeのSwift観を“the Doctor does not bear very hardly on Swift.”と述べている。次にSwiftについて，聴き手に更に関心を持たせるため，サッカレーは次のような疑問を投げかける。“Would we have liked to live with him ?”“Would you have liked to be a friend of the great Dean ?”そして彼は自分の答えを様々に用意し，これらを示すことで，Swiftと他の人物を比較させつつ，人間としてのSwift像を実感させている。

I should like to have been Shakespeare's shoeblack–just to have lived in his house, just to have worshipped him–to have run on his errands, and seen that sweet serene face.

. . .Who would not give something to pass a night at the club with Johnson, and Goldsmith, and James Boswell, Esquire, of Auchinleck ? The charm of Addison's companionship and conversation–but Swift ? If you had been his inferior in parts. . . he would have bullied, scorned, and insulted you; if undeterred by his great reputation, you had met him like a man, he would have quailed before you, and not had the pluch to reply, and gone home, and years after written a faul epigram about you. . . . (Bio. XI, 131)

これらの過去の人間を19世紀に一堂に会して住まわせて見るのは，サッカレーの特異な想像力によるものである。これらの文こそ，“unjustice”“greatly underrated the intelligence and

perception of his audience" (*Morning Post,* June 27, 1851) などと非難されている所であろう。しかし，これはサッカレー話術であり，聴き手に媚びるための作り事と決めつけるものではないと思われる。ここでは日常的な事と，文学上の出来事が同一平面で語られているのである。

Swift については，やがて政治，宗教のことに及ぶ。ここではサッカレーは Swift の時代背景を語ることを忘れない。

> But we must remember that the morality was lax—that other gentlemen besides himself took the road in his day—that public society was in a strange disordered condition, and the State was ravaged by other condottieri. . . . Men were loose upon politics, and had to shift for themselves. They as well as old beliefs and institutions, had lost their moorings and gone adrift in the storm. As in the South Sea Bubble, almost everybody gambled; as in the Railway Mania—not many centuries ago—almost everyone took his unlucky share: a man of that time, of the vast talents and ambition of Swift, could scarce do otherwise than grasp at his prize, and make his spring at his opportunity. (Bio. XI, 135)

ここでは語り手の熱気が伝わって来る。彼は "The morality was lax" "loose upon politics" "everybody gambled" などなど，ちょうど *Vanity Fair* の Becky Sharp にただようような生き生きとした世界が繰り広げられる。それは若い頃の一種の "Prodigal Genius"[18] とも呼ばれるほどの "an incorrgible gambler" であったサッカレー自身と同質の世界である。

V

そこでサッカレーは最終的に Swift をどのような人間と評価していたであろうか。

> But Swift ? . . . He could conduct an argument from beginning to end. He could see forward with a fatal clearness. In his old age, looking at the "Tale of a Tub," when he said, "Good God, what a genius I had when I wrote that book !" I think he was admiring, not the genius, but the consequences to which the genius had brought him—a vast genius, a magnificent genius, a genius wonderfully bright, and dazzling, and strong,—to seize, to know, to see, to flash upon falsehood and scorch it into perdition, to penetrate into the hidden motives, and expose the black thoughts of men,—An Awful, an evil spirit. (Bio. XI, 147)

サッカレーは前述の Johnson の Swift に対する態度を今度は自分のものとして考えてみる。Swift の天才とは，彼の全人間性を指すのではない。彼という人間に宿る，人間の中に隠され

た動機を見通し“the black thoughts of men”を暴露することの出来る恐るべき“an evil spirit”であると解釈する。このことはSwift自身も気づいていない。サッカレーはこの立場から“Drapier's Letters,”“Modest Proposal”そして“Gulliver”へと解釈していく。“Gulliver”では，サッカレーは“In fact, our great satirist was of opinion that conjugal love was unadvisable, and illustrated the theory by his own practice and example–God help him!”と語る。おそらく，語り手はこれも真実であると受け入れているのではなかろうか。

この部分については，サッカレーがSwiftを感情的に攻撃しているという極めて表面的な見解がある。[19] しかし，サッカレーは続いて“... to such I would recall the advice of the venerable, Mr. Punch to persons about to marry, and say “Don't.”（図版B）を紹介していることからも理解できるように，Swiftを非難するサッカレーの言葉は，いわばドラマティック・アイロニーと考えたい。

図版B

ADVICE TO PERSONS ABOUT TO MARRY.—Don't.

ADVICE TO PERSONS WHO HAVE "FALLEN IN LOVE."—Fall out.

ENCOURAGING.—*George (who has just engaged himself to the Girl of his heart) breaks the happy news to his friend Jack (who has been married some time).—Jack.* "Ah! well, my dear fellow, marriage is the best thing in the long run, and I can assure you that after a year or two a man gets used to it, and feels just as jolly as if he'd never married at all!"

出典
Mr. Punch's Books of Love
Punch Library of Humour Edited by J. A. Hammerton. The Educational Book CO. LTD. 7.

さらに時代はヴィクトリア朝である。“–which made him about the most wretched being in God's world.”と家庭の幸福を賛美する社会の慣習に同調する姿勢を示すことを忘れない。文末につけられた註には，次のようにSwiftの日記が紹介されている。“My health is somewhat mended, but at best I have an ill head and aching heart.” –*In May* 1791. これこそSwiftが示すアイロニカルな自己表現又は自己弁護に他ならないと考えられる。サッカレーはこれをつけることで，もう一つ自分にマスクをつけたのではなかろうか。そして彼は，Swiftの紹介をすることで，半ば自己表現をしていると考えられる。

We view the world with our own eyes, each of us; and we make from within us the world we see. A weary heart gets no gladness out of sunshine; a selfish man is sceptical about friendship, as a man with no ear doesn't care for music. A frightful self-consciousness it must have been, which looked on mankind so darkly through those keen

eyes of Swift. (Bio. XI, 154)

したがって，ここにはSwiftの人間性について同情的な見方が入ってくる。そして，Swiftと二人の女性StellaとVanessaの話に移る。Swiftは女性描写の点などからも，彼の「女性呪詛」という言葉もでるほどである。しかし，ここでは違ったサッカレーの視点からの解釈が劇的に示されている。

He wanted to marry neither of them—that I believe was the truth; but if he had not married Stella, Vanessa would have had him in spite of himself. . . .the news of the Dean's Marriage with Stella at last came to her, and it killed her—She died of that passion. (Bio. XI, 160)

という解釈を下し，やがて次のエピソードを取り上げている。

In a note in his biography, Scott says that his friend Doctor Tuke, of Dublin, has a lock of Stella's hair, enclosed in a paper by Swift on which are written in the Dean's hand, the words: *"Only a woman's hair."* An instance, says Scott, of the Dean's desire to veil his feelings under the mask of cynical indifference. (Bio. XI, 162)

と最初にScottの示す標準的な解釈を示している。しかし，続いてサッカレーの次のようなcommentが始まる。

See the various notions of critics! Do these words indicate indifference or an attempt to hide feeling? Did you ever hear or read four words more pathetic? . . .only love, only fidelity, only purity, innocence, beauty; only the tenderest heart in the world stricken and wounded, and passed away now out of reach of pangs of hope deferred, love insulted, pitiless desertion; —only that lock of hair left; and memory and remorse, for the guilty lonely wretch, shuddering over the grave of his victim. (Bio. XI, 162)

ここには，Swift自身の心の動きが描き出されている。これを"memory and remorse"で強調して，"the guilty lonely wretch"はSwift自身が自分をそう非難しているのである。[20] そしてSwiftを思いやるサッカレーのSwift評は続く。

And yet to have had so much love, he must have given some. Treasures of wit and wis-

dom, and tenderness, too, must that man have had locked up in the caverns of his gloomy heart, and shown fitfully to one or two whom he took them. (Bio. XI, 162)

サッカレーは考える。Swift の中に女性に与えるものがあったのではないか。しかし Swift は何時もは暗い胸の中に彼の宝とも言うべき“wit”や愛を納め，ときどき洩らすように示している。Swift は常に孤独である。そしてサッカレーの Swift 像は次のように締めくくられる。

He was always alone—alone and gnashing in the darkness, except when Stella's sweet smile came and shone upon him. An immense genius; an awful downfall and ruin. So great a man he seems to me, that thinking of him is like thinking of an empire falling. We have other great names to mention—none I think, however, so great or so gloomy. (Bio. XI, 162)

サッカレーは Swift は人間の悲しみを抱きながらも偉大な，まさに天才的な文人であると述べている。

サッカレーは人間としての Swift 像を描くに当たり，数人の伝記作家を参考にし，そして彼の作品も殆ど完璧なまでに読んでいる。そして，Swift 像をある時は劇的に，またある時は分析的に，視覚的表現で描いている。しかし，これまでサッカレーの *EH* 評は部分的に切り取られて，その多くは断片的に非難の対象となってきた。

Ⅵ

サッカレーはこの Swift の講話で Swift を“Harlequin”として描くことから始めている。しかしこれを描くサッカレー自身も“Harlequin”であることを意識している。サッカレーは，18世紀の人びとが物事を見て彼らと語り，彼らの中に住まうということは，娘の Ritchie も説明しており，その通りであるが，サッカレーは18世紀の人間をヴィクトリア朝の中において語っている。そしてサッカレー自身も，風刺家であり，特にヴィクトリア朝社会を語り，ヴィクトリア朝人に語りかける時は，道化師のマスクをつけた語り手であることを忘れてはいけないと思う。

なぜならば，1850～1851の冬には Dickens や Forster が中心となり，“Dignity of Literature and Art”を唱えて文士のギルドを結成しようとする動きがあった。このモットーは Carlyle の“The Hero as Man of Letters”が基礎になっていたであろう。[21] したがって，作家は弱点や欠点のある，あまりにも人間的なものであってはならない。このような社会背景のもとでは，サッカレーの18世紀作家たちを描く視点は，こうした流れに逆らうものであった。

講演はSwiftがまだ始まりに過ぎない。以下の18世紀の作家たちについて，そして最後の“Charity and Humour”を含めてサッカレーのHumourist論については次項にゆずる。

註

1) Dudley Flamm, *Thackeray's Critics: An Annoted Biography of British and American Criticism 1836-1901* (The University of North Carolina Press, 1966).
2) John Charles Olmsted, *Thackeray and His Twentieth-Century Critics* (Garland Publishing, Inc. 1977).
3) Edgar F. Harden, *Thackeray's English Humourists and Four Georges* (New York: University of Delaware Press, 1985).
4) *The Letters and Private Papers of W. M. Thackeray,* collected and edited by G. N. Ray (Oxford U. P., 1946)
5) Gordon N. Ray, *Thackeray: The Age of Wisdom 1847-1863* (London: Oxford U. P., 1958) p. 134.
6) E. F. Harden, p. 21.
7) J. C. Olmsted, p. 418.
8) D. Flamm.（同書からの引用項目は（　）内の数字で示す。以下も同じ。）
9) E. F. Harden, p. 19.
10) *The Age of Wisdom,* p. 173.
11) *The Centenary Biographical Edition of the Works of W. M. Thackeray,* vol. 10.（このテキストからの引用はBio.と巻数およびページ数のみ（　）内に示す。）
12) *The Age of Wisdom,* pp. 139-140.
13) E. F. Harden, p. 35.
14) Ibid., p. 21.
15) この講演が出版された時，＊記号に注がつけられた。後出の†記号も二次資料をもとに注がつけられた。
16) E. F. Harden, p. 37.
17)「ショナサン・スウイフトという男は，いったいどんな人間であったのか，これがどうも，見る人次第で，実にまちまちなのである。…どうせ人間に対する評価など，見る人次第で判断の異なることは，わたしたちだとて日常いくらでも経験する話だが，それにしても，スウイフトの場合はあまりにもひどい。」中野好夫著『スイフト考』岩波新書，1978，P. 114。
18) John Carey, *Thackeray: Prodigal Genius,* (London: Faber & Faber, 1977).
19) 岡崎祥明著『スイフト研究』南雲堂，1978，P. 146。
20) E. F. Harden, p. 53.
21) *The Age of Wisdom,* pp. 150-153.